

1 Jp-7 畳空間にかかわる住様式と住意識の検討-首都圏の注文戸建住宅における-
(第3報 室機能からみた畳空間の動向)

○伊東理恵* 今井範子* 川村道乃**
(*奈良女大, **鎌倉女大・非)

【目的】第3報では、現住宅において畳空間がどのような機能を持つ部屋として、どのように存在しているのかその動向を明らかにすることにより、今後の畳空間の方向性を探る。

【方法】第1報と同じ。

【結果】畳空間の室機能は、畳室で行われている生活行為から判断し定義した。畳室1室の場合(N=186)、客間ないし予備室が半数以上を占める。残りは居間2割、主寝室1.5割であり、客間や予備室の形で残っていることが再確認できる。居間は住宅規模に関係なく存在している。第2報でみたように隣接型の方が独立型よりやや多いが、独立型では8割が玄関近くに位置している。玄関近くにあるものの6割は客間ないし予備室。隣接型のほとんどはリビングにつながっており、居間、客間が各3割を占める。年齢との関連は、夫、妻とも60歳以上では客間が半数を超えるのに対し、若年層ほど客間の割合が低くなり30代では2割程度である。成育住宅との関連をみると、客間の場合は、夫・妻とも洋室が多い住宅で育った人より畳室の多い住宅で育った人の方が多く、居間の場合は成育住宅の畳室・洋室数の割合、居間の形式に関係なく存在している。室規模は6畳が半数、ついで8畳が4割をしめるが、独立型も隣接型も室機能による広さの差はみられない。畳室2室の場合(N=90)、第2報でみたように「リビング隣接室+独立室」が3割強を占め、その3割がリビングに居間ないし茶の間が隣接し、主寝室が独立しているもの。9割の世帯で1室増室希望がある。畳室のない住宅では半数が客間を希望し、畳室1室以上の住宅では、夫または妻の個室が2割、2つめの居間、家事室、納戸などを希望。2つめの居間の場合、室形式として、畳室、洋室内の一角に畳コーナーなど畳空間を希望する者が8割存在する。